第 2 回 日本メディカルコミュニケーション学会学術集会：シンポジウムでの通訳ボランティア報告

順天堂大学大学院医学研究科　医療通訳　修士 2 年生　　浅井ゆかり

【日本メディカルコミュニケーション学会学術集会の通訳ボランティアデビュー】

名古屋にて、ハイブリット形式で開催予定の学会通訳ボランティアの打診を 6 月中旬に受けた。これまで、学会 Q&A の遠隔通訳の経験がないため、「千載一遇の機会なので挑戦してみたい」というポジティブな気持ちと、「単語や背景知識を学ぶ時間を捻出できるだろうか？」という不安な気持ちがせめぎあった。しかし、(1)開催まで 4 ヵ月弱の時間がある(2)通訳ペアを組み、交互に逐次通訳ができる(3)演者の先生方から事前打ち合わせをしていただけることから、引き受ける覚悟が決まった。

【シンポジウム「医療者におけるメンタリング」における Q&A 逐次通訳の詳細】

10 月 1 日のシンポジウムテーマ「医療者におけるメンタリング」(10：30-12：00)において、3 名の演者がそれぞれ 20 分発表した後に、15 分の Q&A が設けられる。業務は、ハワイから遠隔参加する英語ネイティブに対して、(1)質問(日英)と回答(英日)の逐次通訳をする(2)現地参加の登壇者 2 名に対する日本語 Q&A の要約を zoom のチャット機能を用いて英語に翻訳する事であった。

【準備期間】

6 月中旬～当日まで、演者 3 名の論文情報を収集し、周辺情報の理解に努めながらメンタリングに関する論文を読むように心がけた。また事前に共有された資料を数回読み込み、エクセルで単語帳を作成した。学会の 1 週間前から、各演者のスライドを集中的に復習し理解を深めた。具体的には、手書きの単語帳を作成して各演者特有の表現や適切な英単語をインプットした。

【事前打ち合わせ】

① 9 月上旬：座長 1 名、演者 3 名と通訳 2 名が参加し、約 1 H の事前打ち合わせを zoom で行い、各演者と当日のプレゼンの内容、想定される Q&A およびフローを確認した。

② 9 月下旬：通訳 2 名で約 15 分の打ち合わせを行い、日英・英日の役割を決定。

③ 9 月末：本番前日に zoom 経由で名古屋の会場との接続および音声の確認を行うため、自宅の PC から参加した。

【学会当日】

当日 AM9 時頃、自室のノート PC が起動しないという想定外のアクシデントに見舞われ、思考停止状態に。すぐに通訳ペアに連絡して大学に移動すると伝え、10 時過ぎに研究室の PC から名古屋の会場にアクセスすることができた。本番では事前の予習が功を奏し、自然に通訳(日英)できたが、座長の質問に対するチャットの翻訳担当を決めていなかったため、いきなり焦った。反省点は、座長の「通訳は？」とのフォローが入るまで、チャット翻訳に没頭していたことである。この経験から、通訳中は常に自身のパフォーマンスを客観的かつ冷静に俯瞰することの重要性を痛感した。

【学会通訳のアドバイス】

① 通訳を組むペアとしっかり連携し Q&A の担当（日英、英日）を決め、自分なりに質疑応答を想定して調べておく。質疑応答は専門用語だけでなく、各演者特有の言い回しもチェックしておく。発話は常にオーディエンスを意識し自信をもって分かりやすくする。

② 担当外であっても、英日・日英の逐次通訳箇所は常に集中して聞き取り、必要であれば通訳ペアをフォローする。

【シンポジウムの通訳を終えて】

通訳で大切なのは、実践する勇気と経験から学ぶことだと実感できた。改めて、大野先生のご配慮をはじめ、このような貴重な機会を与えてくださった、榊原先生、森田先生、そして経験豊かな演者の先生方、シンポジウム関係者すべての皆様に心から感謝するとともに、今回の経験をもとに今後も精進努力を積み重ねて通訳者として活躍の場を広げていきたい。